

都市における花と緑の役割とありかた試論

—国際花らんまん'95 展示「世界の花と緑のまちづくり展」から—

下 村 孝

はじめに

1990年に開催された国際花と緑の博覧会は身近な花と緑に対する人々の関心を高める役割を果たしたといえる。花博の関係省庁であった農林水産・建設両省が花の町づくりコンクールを開催し、その参加者も増加の一途をたどっている。まさに、国をあげての「花いっぱい運動」といえよう。一方、若い女性向けの雑誌にヨーロッパの庭園や園芸の紹介記事が大きく取り上げられる¹⁾など人々の間での関心もこれまでになく高まっている。それらを背景として、イギリスなどの園芸先進国の園芸技術であるコンテナガーデニングが流行し、家庭や町中にプランターやハンギングバスケットが「氾濫」するようになってきた。このように、花と緑の利用事例は量の面での進展が見られるようになってきたが、残念ながら質の点では欧米に及ばず未だ初歩の段階にあるといわざるを得ない²⁾。

ヨーロッパでは庭園や住まいの内外での花の利用の歴史が長く、その中で築かれてきたアイデアや利用技術の蓄積が生活の中に文化として息づいている^{3,4)}。わが国の風土と文化は木と土と紙の住まいに草花や彩りのある植物の利用を極力抑えた庭園様式を産みだしたが、戦後50年を経た今、いわゆる洋風の、実は国籍不詳の住まいの様式を定着させつつある。その住まいに花と緑の彩りを添える技術としてヨーロッパの園芸に目を向ける⁵⁾のは当然のなりゆきといえよう。しかし、現在の所、学ぶべき園芸技術の外観や表面的な形式のみの模倣に留まっており、それが質の点での停滞につながっているのではない

かと考えられる⁶⁾。ヨーロッパの花と緑の利用技術を学ぶためには上に見たように文化として定着してきた園芸をトータルに理解する必要がある。筆者はわが国の「花と緑」ブームを単なる流行に終わらせず花と緑を取り込む生活様式の発展につなげたいと考えて、これまで、論説^{26~9)}や講演などで持論を吐露してきた。

今回、大阪市が花博5周年を記念して開催した花と緑のイベントである国際花らんまん'95での展示「世界の花と緑のまちづくり展」を企画する機会に恵まれたので試論の一部としてその内容を紙面に再現したい。文章および写真の大半は筆者によるものであるが、一部、知人および花と緑の関係機関から借用した。詳しいクレジットは謝辞の項に示した。

国際花らんまん'95 展示「世界の花と緑のまちづくり展」

展示の趣旨

ヒトは自然の中で生まれ自然の一員として生活を続けてきました。しかし、文化を持ち科学を発展させて人となって以降、私たちは都市に住み自然から遠い生活を余儀なくされています。

都市に花と緑を持込むことを望むのはヒトとしての摂理であるとさえいえます。

世界の人々がどのように植物を身近に置こうとしているのかを写真で紹介し、これからの花と緑の町づくりの手立てとしていただけたらと考えています。

第1のコーナー

一都市の花と緑 その重要性と人々の触れ合い

このコーナーでは都市の発達による緑の消失の過程を眺め、都市の住民にとっての花と緑の重要性を考えます。また、世界各地での花と緑との触れ合いの様々な光景を紹介します。



1-1 照葉樹林：原始の森

カシやシイなどの照葉樹が生い茂る森が私達の住む日本列島中部以西の本来の姿でした（沖縄本島中部原生林）。



1-2 都市の発達（中国山脈裾野）

山間部の集落から都市への発達ははじまります。緑に代って道路や住宅が造られ稲やスギなど有用植物が植栽されています。



1-3 山里の生活

人が山裾に住み着き農耕を営むようになると、植林が行われ山の様子が変わってきます。稲刈り後のヒガンバナ（河内長野市郊外）。

1-4 緑の见えない大都会

（東京新宿区）



大都会にも公園や街路樹の緑があるのですが、ほとんどすべての空間は道路と建物に

占められていて潤いを欠く空間となっています。

1-5 「最後の葉」は実話？

胆嚢の手術後、緑の見える病室の患者は、煉瓦壁しか見えない患者より苦痛も弱く、退院も一日早くなったという研究結果です（図省略）



1-6 自然のリズム

シラカバの芽吹きに先立ちミズバショウが静楚な姿を見せています。自然のリズムが人をリフレッシュさせるので

す（長野県戸隠高原）。

1-7 エアロビクスよりも園芸作業？

草刈り、種まきなどの園芸作業は知らず知らずの内に健康体操をしていることになるという、れっきとした研究成果です（データ省略）。



ス）。

1-8 ホルトセラピー

園芸を通じて心と身体の療養を行う試みです。レイズド・ベッド（高植え床）は車椅子でも作業が可能です（イギリス）。



ダ・ボスコープ）。

1-9 庭は身近な自然

庭のある住いでは木々、草花、小鳥や虫が季節の移り変わりを教え、自然のリズムを知ることができます（オランダ・ボスコープ）。



ます（オランダ・アールスメール）。

1-10 花と緑は人のためならず

樹木、芝、草花、煉瓦壁、レースのカーテンが美しく調和し、住いのグレードを高めます（オランダ・アールスメール）。



自然として心を安らげてくれます。

1-11 庭の花と緑は大自然と人を繋ぐ

京都北山の大自然に囲まれた民家にも庭があり、シダレザクラとシャクナゲが身近な



1-12 「町を美しく」に心を合わせて

滋賀県伊香郡高月町雨森地区は100戸足らずの地域ですが、水と魚と花と緑で美しい町作りを「みんなで楽しく」進めています。



1-13 熱帯都市のクリスマス

赤道間近のシンガポールで美しいデコレーションを見ました。町中で趣向を凝らした

楽しい飾り付けが見られます。



1-14 熱帯の「四季」

マレーシアの農業公園にあるテンペレートハウス。温帯地方の四季を花と緑で演出します。初夏の庭園に人々の好奇の目が向いています。冬には雪も降らせます。

奇の目が向いています。冬には雪も降らせます。



1-15 組木建築とゼラニューム

白壁と材木のおりなす伝統的な幾何学模様には、赤とピンクのゼラニュームが彩りを添

えます（グリム童話の故郷、ドイツ・カッセル）



1-16 庭がなくとも花と緑は欠かせない

狭い空間を利用した立面の庭。スイートアリッサムとツタ、ピラカンサに室内の緑が

膨らみをもたらします（オランダ・ハーグ）。



1-17 住いのまわりも美しく

住いと車道を隔てる街路樹を取り込んだ花と緑のスペース。安らぎと落ち着きの空間

が広がります（オランダ・アールスメール）



1-18 高層住宅地の花（アメリカ・ロサンゼルス）

ショッピングセンターに買物にでかける家族連れ、父親のハッピーな表情は満開のキ

ョウチクトウのせいでしょうか。



1-19 北の国の花と緑

カナダはロッキーの大自然に恵まれた北の国。広い敷地に花と緑が輝き豊かな住空間

を作り出しています（バンクーバー市）。



1-20 黄金の花のトンネル

キングサリはイギリスで人気のある初夏の花です。楽しそうな家族連れがトンネルの下を歩きます（イギリス・キ

ューガーデン）。



1-21 バラの香に包まれて

ヨーロッパの人々はローマ時代にもたらされたバラをこよなく愛しています（パリ・ブローニュの森にあるバガテ

ル園）。



1-22 ベゴニアと母娘

ドイツ南部のマイナウ島は多くの人が訪れる花の島。新品種に見入る親子の後ろ姿を初夏の光が柔らかかに照します。



1-23 伝統の住いと花と緑

松江、宍道湖畔の旅館の玄関先。木の建物の落ち着いた趣に門冠（もんかぶり）のマツが緊張感を与え、ツワブキ

が彩りを添えます。



1-24 春を告げる花

待ちかねた明るい春の到来です。公園の草地に植えこまれた無数のクロッカスが花を開き、人々の心も華やぎます

（イギリス・ハンプトンコート）。

第2のコーナー

一都市で触れる花と緑一

このコーナーでは都市にある花と緑の施設の役割を

- (1) 訪れて楽しみ遊ぶ
- (2) 花と緑とその情報の提供
- (3) 花と緑を育てる、の3つに分けて紹介します。



2-1 王侯貴族から市民の手へ

君主の領地が市民に開放され近代公園の基礎が作られました。ヘンリー8世のハンブ

トンコートも公開されて公園の中にあります。



2-2 パークは広大な緑の楽園

絶対君主チャールズ1世の狩猟場跡地・リッチモンドパークはシカがくつろぐ440haの

広大な公園で、ロンドン市民が憩います。



2-3 日本最初の近代公園

日本で最初に作られた公園はヨーロッパ式の大花壇を備えた東京の日比谷公園でした。今も都民の憩いの場として親

しまれています。



2-4 小さな公園も緑は豊か

ロンドンには100haを超えるパークから、小さなスクエアと呼ばれる小公園までが散

在して市民に豊かな緑を提供しています。



2-5 熱帯雨林の中の公園 (マレーシア)

クアラルンプール郊外の農業公園。整形式の庭園と左奥の建物は温帯の四季の花と緑

を見せる冷室 (テンペレートハウス)。



2-6 植物を使った実証

メンデルの遺伝の法則をペゴニアの花色で示しています。

赤と白の子供はすべてがピンク、孫では赤と白が3:1に

分離しています (ドイツ・ハンブルグ大学植物園)。



2-7 キューガーデン (ロンドン)

世界でもっとも有名な植物園は5万種類の植物を栽培し、種の保全や有用植物としての

利用のための研究にも取り組んでいます。



2-8 ウィズレー園芸植物園

王立園芸協会の所有で、園芸植物の展示、研究、知識の普及を業務としています。年

間30万人の人々が訪れ、花と緑を楽しみます。



2-9 熱帯植物研究の拠点

シンガポール植物園は約150年前に作られ、ラン、ヤシ、バンブーなどを中心に約3000種類の熱帯植物を栽培・展示

しています。



2-10 京都府立植物園

鴨川のほとりに大正13年に設立された植物園。最近リニューアルした温室が有名ですが生態園やバラ園など見どころも豊富です。



2-11 フラワーパーク

兵庫県立のファームパークが淡路島にあります。ロックガーデンは、良好な排水を維持するための本格的な工事が

施され、植物の種類も多く、わが国屈指の施設です。



る施設もあります。



ユーモラスです。



が、ヨーロッパ並みの施設もできつつあります。



が詳しく示されています (シュトゥットガルト)。



果樹、花の栽培が義務のようです (IGA 会場)。



業は楽しく健康に (シュトゥットガルト)。

2-12 フラワーパーク

パリ東端・ヴァンセンヌの森のパルクフローラル。1969年の花博会場跡地を利用してハーブ園や世界の植生を見せる施設もあります。

2-13 花のトピアリー

花の公園マイナウ島はバラで有名ですが、このトピアリーもよく知られています。アヒルの親子が水面を泳ぐ姿が

2-14 市民公園 (大阪府河内長野市)

庭の無い人々に園芸の場を提供する市民農園。規模が小さく野菜が多いのが特徴です

2-15 クラインガルテン (ドイツ)

国際園芸博 (IGA) の展示。子供の療育園として出発して現在まで、130年の歴史

2-16 クライガルテンでの園芸作業

初夏の太陽に照されて園芸作業を楽しむドイツの男性。広い面積を持ち、野菜の他、

2-17 クラインガルテンは社交の場

日の長い夏の夕刻。一仕事終えた人達が集り、そろそろビールが運ばれます。園芸作



関わるあらゆる用品が揃ってしまいます。



れ、アイデアと商品を同時に買うことができます。



ます。(イギリス・リッチモンド)。



ルというのも南国ならではのものでしょう。



人々が訪れるようになりました。



す (ドイツ南部)。

2-18 ドイツ中部のガーデンセンター

日本の大型ホームセンターがすべての売り場に園芸用品を置いたようなもの。花と緑に

2-19 オランダのガーデンセンター

ガラス温室のような広い売場に、テラコッタの容器に植えた室内植物が美しく展示さ

2-20 ガーデンセンターでの買物

宿根草、果樹苗、コンテナなど品揃は豊富です。カートに積んだ品物は出口で清算し

2-21 シンガポールのガーデンセンター

中心部から北へ車で30分のところに11軒が軒を並べています。花苗のクリスマスセー

2-22 マレーシアのガーデンセンター

クアラルンプール郊外。近年になって園芸植物の国内消費が増大し、ここにも多くの

2-23 植物の生産：樹木

エスパリアというヨーロッパ独自の様式で仕立てた果樹の苗もの。広い圃場で大量に生産され、出荷をまっ



2-24 植物の生産：草花

温室の中で大量に生産される草花の苗，セルトレイとよばれるプラスチック製の容器栽培が主流になっています

(大阪府)

第3のコーナー

一花のまちづくりを支えるもの一

このコーナーでは人々の花のまちづくりを支援する催しを

(1) コンクール

(2) 花と緑のイベント：花博，フラワーショーなど，に分けて紹介します。



3-1 花の国際コンクール ノルデステ (ポルトガル)

日本語で花協定と訳される Entente Florale は国際園芸家協会 (A.I.P.H.) がスポンサー

の国際コンクールです。



3-2 花の国際コンクール パース (イギリス)

A.I.P.H.に代表を送る国はコンクールに参加することができ、1国から2市町村が参加できます。



3-3 花の国際コンクール メッス (フランス)

モーゼル河とセーヌ河の合流点にある村から、刺しゅう花壇を中心とした町並みが参

加品目です。



3-4 花の国際コンクール ビュルコー村 (ドイツ)

シュバルツバルトの南にある人口 240 人の村。針葉樹の緑とおとぎ話のような家と花の

美しい村。



3-5 花の国際コンクール コー (ベルギー)

人口 132 人の住民に対し、年間 150 万人の観光客が訪れる花と緑の美しい村です。花壇

や旗に花の村の心意気が表れています。



3-6 花の国際コンクール カーリングフォード (アイルランド)

ダブリンの北 110km にある人口 700 人の村です。伝統の民俗衣裳と人々の表情が花の町作りの意気込みを表してい

ます。



3-7 国際花と緑の博覧会'90

日本ではじめて開催された花博は 2500 万人を集めて閉会しました。これを契機として

花と緑という言葉が定着しました (大阪市鶴見区)。



3-8 花博：「花」元年

花博ではそれまでの日本ではほとんど見ることはできなかったすぐれたデザインの花壇が作られました (花の谷)。



3-9 花博後：美しい花のまちづくりへ

冷室のメコノプシス (青いケシ) など話題をよんだ咲くやこの花館ではハンギングバスケットのコンテストなどが開かれています。



3-10 フロリアード'92

10 年に一度のオランダの国際花博の第 4 回目。堤防が破壊した場合に国土のどこまで浸水するかを示して、国土保

全をよびかけています。



3-11 フロリアード：自然保護の心

会場内に取り込んだ運河を横断する通路から水の様子、魚や水草など運河の生態系が

観察できます。環境保全の気運を高める試みです。



3-12 フロリアード：園芸生産の国

オランダでの園芸作物の生産現場を再現した展示。屋外と温室栽培の2つのコーナー

に分かれ、ここでも環境への配慮が見られました。



3-13 IGA' 93 (ドイツの国際花博)

第5回目。シュトゥットガルト市はIGAの開催で市の東西を南北に広がる緑地を繋ぐ

という都市計画の宿願を達成しました。



3-14 IGA' 93：環境保全の優等生

ドイツはヨーロッパの中でも環境保全志向の強いところ。テーマ庭園にもドイツ自生の

ワイルドフラワーが使われています。



3-15 IGA' 93：自然との共生

21世紀の住環境を模索する展示。屋上緑化は省エネと大気汚染の軽減を目指したもので、リサイクル資材の展示も見られました。



3-16 花と緑のイベント

世界に名を知られたロンドンのチェルシーフラワーショウ。テムズ河畔の敷地にはブース、テント、露店が並び園

芸情報を求める人々が溢れます。



3-17 オランダ・キューケンホフの球根

5月の3週間だけ開園する球根植物の植物園。ムスカリが表現する水の流れの縁にチューリップとフリチラリアが彩りを添えます。



3-18 庭のデザインはプロの手で

チェルシーショーのテントの中でガーデンデザイナー達が実績を展示して仕事の依頼

に応えます。庭と園芸の英国ならではの光景です。



3-19 花のパレード

オランダ第二の花市場のあるアールスメールで、花の生産者・流通業者などが花車を仕立ててパレードを繰り広げ

ます。行列の準備OK。



3-20 プライベートガーデンオープンデー

英国では年に1回、個人の庭を公開するというチャリティー活動があり、全国で3500

の庭に150万人が訪れます。

第4のコーナー

—花と緑の利用技術—

このコーナーでは狭い場所や住いに花と緑を持ち込む技術を

- (1) 花壇：ボーダー
- (2) ウォールガーデン
- (3) コンテナガーデニングにわけて紹介し、デザインの大切さをも紹介します。



4-1 花壇の歴史

英国テムズ河上流のハンプトンコートに残る16世紀建造のオランダ庭園。この草花の配色は17世紀の絵を元に再現

されています。



ューガーデン)。



も一流。



労力をかけた展示。



コープ)



スコープ)。



4-2 花は緑の中でこそ

芝生の中で美しく映えるリボン花壇。背の高いカンナと中心の花鉢が立体感を生み出し、花壇の質を高めます(キ

4-3 ハツとする立体花壇

ロンドン市内のリージェントパーク。入口からの広い通路にアイストップとして置かれたもの。ユーモアのセンス

4-4 伝統と芸術性

英国でタペストリー花壇が流行したヴィクトリア朝は園芸の最も盛んな時代でした。ウイズレー植物園での時間と

4-5 狭い空間でも花壇を

狭い空間での花壇として推奨されるボーダー。アイデア次第で美しい空間が作れます。(植木の町、オランダ・ボス

4-6 究極の省スペース

ボーダーと壁面緑化を組合わせた高度なアイデア。狭い場所にも花と緑の持込みが可能なことを教えています(ボ

4-7 ウォール

断崖に広がる断層を覆うドイツ自生の草花。ヨーロッパではこの風景を庭に持込んでいます(IGA'93会場)。



ズレー植物園)。



が和風の風情を醸し出しています(大阪府八尾市)。



(ドイツ・カッセル)。



す(ドイツ・フランクフルト市)。



テナが展示されるハンプトンコートフラワーショー。

4-8 ウォールガーデン

庭に石を積み草花を植えた花壇。ウォールとだけ呼ぶこともあります。乾燥を好む宿根草が多く使われます(ウイ

4-9 わが国のウォールガーデン

土留めの石積みに根を下ろしたベゴニア・センパフローレンス。落ち着いた色合い

4-10 わが国のウォールガーデン-2

生け垣の根元から株を広げたダイアンサス。常緑で乾燥に強いシバザクラ、マツバギク、ガザニアも同様に使われます(千早赤阪村)。

4-11 コンテナ園芸

土の無い所での花と緑の利用には容器(コンテナ)栽培が便利です。ただし、美しくデザインすることが重要です

4-12 主役は花と緑

コンテナ園芸ではあくまでも容器は脇役です。美しくないコンテナを使う場合は、隠してしまうのも一つの方法です(ドイツ・フランクフルト市)。

4-13 テラコッタの流行

赤いレンガ色の素焼鉢が近年、大きな流行となっています。ストロベリーポットやフラワーベースなど伝統的コン



「花車」がよい表情を見せます（ドイツ・カッセル）。

4-14 アイデア次第のコンテナ園芸

美しく楽しいコンテナは花と緑を引き立てます。ビアガーデンの看板に使われた「花車」



めのウインドウボックス（ロンドン）。

4-20 ファサードはキャンバス

フラットとよばれる集合住宅の窓辺の花と緑。住いのアイデンティティーを高めるため



の色彩に感心させられます（オランダ・ハーグ）。

4-21 都市に溶け込む花と緑

運河に掛かる橋の欄干。美しくデザインされた草花と周りの彩りを乱さないコンテナ



テハウス）。

4-22 春を待つ心

暗い冬が去るのを心待ちにする人々に窓辺の花は生命の息吹を与えるのでしょうか（ドイツ・フランクフルト・ゲ



ハンギングバスケットとポット（ロンドン）。

4-23 置く場所が無ければ吊るす

吊り下げ（ハンギング）もコンテナ園芸の重要な手段。地下への階段を華やかにする



ちないのでしょくか（アメリカ・ペブルビーチ）。

4-24 ハンギングバスケット

フクシアとロベリアの見事な取り合せに思わず見とれてしまいます。頭の上に水は落



カ・ロサンゼルス）。

4-25 買手をまつ半製品

ミズゴケで裏打ちした伝統的なハンギングバスケットの売場。苗が成長すれば見事な装飾になるでしょう（アメリ



エリカが見えます（オランダ・ボスコープ）。

4-15 廃物も良質ならば効果大

運河を走っていた舟が庭の調度に使われています。コンテナに利用された舳先と艫に



ターの駅名表示。

4-16 花のまちの道しるべ

色とりどりのフリージアが躍るように身を躍らせています。楽しいコンテナは英国の有名なウェリンガーデンシ



熱帯植物楽園）。

4-17 アイデア容器

車輪で作ったベンチを彩るブーゲンビレアの根は麻袋に収まっています。灌水管理さえ怠らなければ大丈夫（沖縄



コツ（ロンドン）。

4-18 シンメトリーの国

窓辺に置いたプランターはウインドウボックスとよばれます。窓枠、カーテン、壁面などと美しく調和させるのが



（ロンドン）。

4-19 小さな花壇

ウインドウボックスの小さな空間を花と緑でデザインする、これを当たり前の感覚と捉えるのが園芸先進国です



4-26 美しく心をこめて

わずか30cm四方の空間の芸術です。花と緑をいかに取り込むか、園芸の先進国に学ぶことは少なくありません（アールスメール）。

ールスメール）。

第5のコーナー

—都市の中の緑の空間—

このコーナーでは都市の緑として注目される

- (1) 壁面緑化
- (2) アトリウム
- (3) グラウンドカバーを紹介しています。



5-1 壁面緑化

無機物の建造物に緑を沿わせて美しい景観を作り出す工夫は古くからあるようです。石壁にヘデラが見事です（シ

ュトウツウガルト）。



5-2 ラブリーグリーン

サンフランシスコのフィッシャーマンズワーフで見た壁面の緑。丹念な造形と心遣いに心が軽やかになります。



5-3 広場を彩る大きな緑

色鮮やかな造形と水の競演を修景するツタとスイガヅラの壁面緑化。いずれもわが国自生の植物です（パリ・ボン

ピドーセンター）。



5-4 町中にも季節の変化

アムステルダム郊外の住宅街。高層の集合住宅壁面を覆うツタ。8月の末にいち早く訪れた秋の冷気で紅葉をはじめ

めたところでは。



5-5 南国の緑のスクリーン

シンガポールチャンギー空港第1ターミナル前の通風筒？を覆うオオイタビ。わが

国自生の有望な常緑つる植物です。



5-6 伝統の技：エスパリア

果樹を二次元的に仕立てる手法で、ギリシャ時代からある生産技術。今では壁面の装

飾に利用されます（ハンプトンコート）。



5-7 花と緑を持ち込む執念

英国ウェリンガーデンシティーで見かけた日曜の園芸作業。金槌と釘でピラカンサを煉瓦塀に誘引する作業が続い

ていました。



5-8 一工夫あり

通路に面した壁にナシをグローブ状に仕立てたエスパリア。花と緑にかける意気込みと生活のゆとりが感じられます（ロサンゼルス）。

す（ロサンゼルス）。



5-9 現代芸術？

サンフランシスコの港の花と緑。明るい太陽の光が複雑な緑の造形に美しい陰影を作り出し、人々の目を引いてい

ます。



5-10 ヨーロッパの壁を彩る東洋の花

ヨーロッパでは日本のノダフジが最も多く、品種の改良も進んでいます。たわわに咲

き乱れる花に息をのみます（ハンプトンコート）。



5-11 壁面緑化の補助材

巻きつく性質のつる植物で壁や塀をカバーするには格子状のトレリスを使います。菱形、扇形などの製品があります（オランダ・ボスコープ）。



5-12 花と香のすぐれもの

わが国原産のスイカヅラ（ニンドウ）はジャパニーズハニーサックル、欧米で人気があります。花弁が赤く染るサラサニンドウ。



5-13 室内の緑

観賞用温室は室内庭園（アトリウム）へのアイデアを提供します。美しい演出で人気のあるロングウッドガーデンのコンサーバトリー（観賞用温室）。



5-14 アトリウム

生きた緑を持ち込んだ室内空間。欧米に先進例を持ち、最近わが国でも多数作られるようになっていきます（大阪府吹田市）。



5-15 職場に持込まれた花と緑

工作機械の会社が職場に取り入れたアトリウム。大型の樹木と下草類が豊富で、オフィス（上部左右）から緑が見えます（神奈川県）。



5-16 ショッピングセンターの緑

ヨーロッパの名門が軒を並べるショッピングセンター。通路脇の花と緑に家族連れ顔もほころんでいるようです（アムステルダム）。



5-17 地表を覆うグラウンドカバー

庭や都市で大地がむき出しになるのを防ぎ緑で覆うことのできる植物。赤いアカエナが地面を密に覆っています（フロリアード会場）。



5-18 常緑で強健なグラウンドカバー

白い斑が美しいフィリヤラン。夏に薄紫の花を付けて美しく地表をカバーします。日向、日陰を問いません（淡路島香の公園）。



5-19 梅雨を彩る紫の花

大型のグラウンドカバーとして利用されるアガパンサス。こんもりと地面を覆い、紫の花を付けます（キューガーデン）。



5-20 日陰に咲く美しい花

わが国に自生するギボウシの仲間は欧米で人気の高いグラウンドカバーです。狭い庭の日陰に向きます（フィラデルフィア郊外）。



5-21 土砂の流亡を防ぐ

法面や砂漠地をカバーして雑草の繁殖や土砂の流亡を防ぐのもグラウンドカバーの役割の一つです。（サンフランシスコ）。



5-22 管理の要らない草花

強健で病害虫に強く、美しい花も咲かせるガゼニアの仲間にはグラウンドカバーの優等生が見出せません（アメリカ・サンタバーバラ）。



5-23 美しい緑と雑草防除

落葉樹の下で地面をカバーし、雑草の繁茂を防ぐのもグラウンドカバーの仕事。ツルマサキは常緑のつる植物（ア

メリカ・シカゴ）。



5-24 斑入りの葉と季節の花

ヘデラはすぐれたグラウンドカバーですが葉の緑が単調。斑入り品種と組み合わせると変化が生まれ、ヒガンバナが季節を演出します（京都市）。

まとめ

1995年1月17日早朝、大地震に襲われた神戸の町は花と緑を使ってわが国でも指折りの美しい景観を作っていた。震災直後の町並みは瓦礫と埃で覆い尽くされ、コンテナや植え柵の草花は無惨な姿をさらしていた。しかし、例年より1ヶ月程度の遅れはあったものの、4月に入ると市役所横にある名物の花時計に草花が植え付けられた。復興作業に多くの人手をとられる中でこのような心遣いがなされたのは、花壇に花を植えることが不急不要のことではなく、人々の心を和ませるための大切な作業であるとの判断があつてのことであろう。事実、震災後に行われた調査は、被災した人々が花と緑でひとときの心の平安を持ち得た事例を数多く記録している¹⁰⁾。

本稿にまとめた展示では、最初に常緑樹で覆われたわが国の原始の姿から、農耕に関わらない人々が集住する空間である都市が生まれる過程を概観している。それは、筆者が、人がかつては大自然の懐に抱かれ、その中で自然のリズムを共有することで生をつないできたこと¹¹⁾を花と緑の必要性を説く大きなよりどころとしているからである。その前提を明確にしないでおくと、本物に限りなく近い作り物の緑や水を与えられずに息も絶え絶えになっているプランターの草花に疑問を持たない状況が生まれてくるのである。都市の緑は生き生きとして人に生命のリズムを与えてくれるものでなければならない。上記

の前提のもとに、その後の展示の中では、住まいや町中で花と緑が作り出す空間がより快適になるために何が必要かをいくつかの項目に分けて解説してみた。

このように写真を中心とした解説は感覚的な理解を促すが、論理的な理解に結びつくまでには至らず、やがて忘れ去られる可能性が高い。科学的なデータや裏付けを付与して、より説得力のあるストーリーをまとめあげることを今後の課題としたい。

謝辞 本稿の執筆にあたり資料提供をいただいた（財）大阪市公園協会および資料収集にご協力いただいた（株）メディアート、さらに、貴重な写真原稿を提供いただいた岩崎益夫（写真番号3-17）、辻本弘美（3-19）、森鈴江（1-19, 24）、八尋和子（1-8, 3-20, キャプションも）、（財）日本花の会（1-12, 3-1~6）各位に謝意を表す。

注および引用文献

1. 例えば、私の部屋 BISES, No.23 (1996), 婦人生活社, など
2. 下村孝, 1994, コンテナガーディングの現状と今後の課題, 新花卉, No.162: 42-47
3. 塚本洋太郎, 1978, 園芸の時代, 日本放送出版協会, pp264
4. Stuart, David, 1988, The garden triumphant, Viking, London, pp317
5. 八尋和子, 1996, いま人気のイングリッシュガーデン 本場のガーデンデザインスクールを探る, Flower Shop, 1月号: 66-71
6. 下村孝, 1993, ヨーロッパに学ぶ花と緑の文化, 環境緑化新聞, 9月1日号5面, 9月15日号4面
7. 下村孝, 1994, 都市緑化に花を美しく生かすために, 環境緑化新聞, 9月1日, 1面
8. 下村孝・建設省都市局都市緑地対策室・家庭園芸普及協会, 1995, 絵になる住まいを目指して 一歩進んだ花と緑の利用マニュアル, pp16
9. 下村孝, 1996, 花と緑を美しく演出するために プランティングデザインの基礎 (前編), グリーンコミュニケーション, No.12: 4-11,
10. 永野明範・上町あずさ, 1995, 被災地での花と緑, 第10回園芸セミナー「阪神・淡路大震災における花と緑の役割」資料集, 園芸研究会
11. O.F.ボルノー (森田孝・訳), 1986, 都市と緑と人間と, 世界 No492: 46-61